

石岡市東石岡

有限会社勾玉工房 Mogi 長谷川秀久

遺跡の立地

石岡市東石岡 3 丁目に所在する社会福祉法人地域福祉会の特別養護老人ホーム建設に伴い、平成 22 年 7 月 26 日から同年 10 月 15 日にかけて 1,850 m² の発掘調査を実施しました。

霞ヶ浦の北端に近く、常総台地に連なる石岡台地から南側に突出する舌状台地上に位置しています。昭和 56 年には茨城県教育財団が南側に近接する舌状台地の先端部分を調査し、縄文時代前期の黒浜式期・浮島式期から古墳時代までの遺構が確認されたほか、弥生時代中期終末ごろの新池台式土器も発見されています。

発見された遺構と遺物

今回発見された遺構は、縄文時代前期（今から 5,500 年前）の黒浜式～浮島式期にかかる住居跡 51 軒、土坑 488 基でした。遺構外で出土した遺物には花輪台式や、諸磯 a 式、十三菩提式、五領ヶ台式など縄文時代早期から中期初頭の、県内でも資料の少ない土器も発見されています。弥生時代の遺構や遺物は発見できませんでした。

前期中葉の黒浜式期の住居跡は調査区の北西方向に集中し、浮島式期の住居跡は調査区の中央から南東側にかけて発見されています。両時期の集落は若干の重なりを見せながらも、その中心がずれています。また、黒浜式期の住居跡は平面方形・不整橢円形を中心で、炉には炉石が設置されていました。浮島式期では平面不整形または橢円形の住居が中心で、柱穴が不明瞭なものが多く、炉は確認されていません。

縄文時代前期の墓

黒浜式期の住居跡群の南側に、直径 70cm 前後、深さ 60cm 前後の平面橢円形の土坑群が検出されました。その断面形状は鍋底状または U 字形になっています。慎重に調査した結果、これらのうち、2 基の土坑から副葬品と判断される遺物が出土しました。副葬品の出土と、人の手によって埋め戻されていたことから、これらの土坑は墓と判断しました。

図 1



土坑の分布は図 6 の分布に示したとおりです。集落域と墓域は区分けがされているようです。一方で、黒浜式の最終末期では黒浜式と浮島式の明瞭な時期区分ができない遺構も多く、浮島式土器を主体に出土している住居が集中する範囲にも黒浜式の墓坑が点在していました。集落が黒浜式期から浮島式期へと移行する段階で、墓域の区割りが崩れていったことが想定されます。

その典型的な例として、調査区の南側で検出された 400 号土坑は、埋没後に上部を削平して浮島期の住居が構築されました。土坑の底には副葬品として黒浜式土器と装身具が埋納されていました。（図 1・2）。

副葬品を出土した土坑

縄文時代前期の墓で副葬品を埋納した例としては、全国的に見てもそう多くはありません。

400 号土坑のほかにも、186 号土坑では黒浜式土器のやや大型の破片とともに、縦型の石匙が出土しています。山形県高畠町の押出遺跡にみられる石槍型の石匙です。石材には朝日連峰を産地とする珪質頁岩を用い、側面に幅が一定の押圧剥離による並行剥離が施され、技法的にも東北地方の大木式の影響を受けるものと判断されます（図 3）。

前出の 400 号土坑では、装身具の出土がありました。土坑底面からは黒浜式土器の底部破片（4）2 個体分と琥珀製丸玉 4 点（11～14）、滑石製管玉 4 点（7～

図2

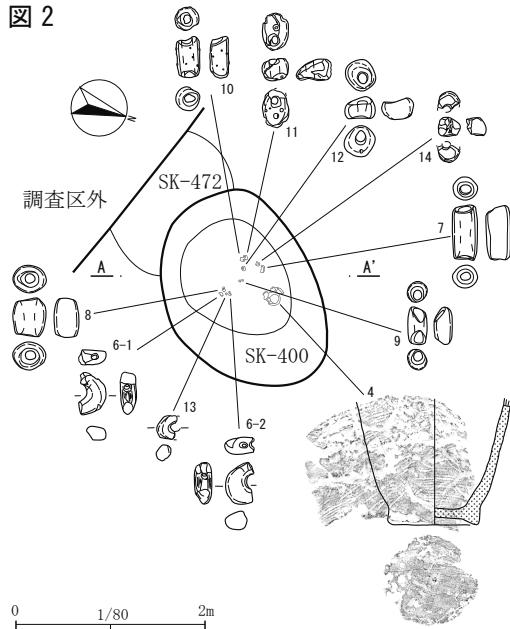
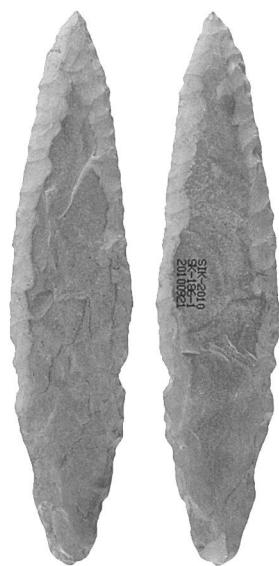
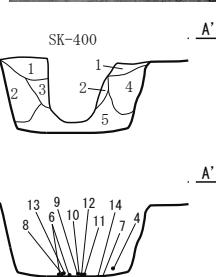


図3



10)、ケツ状耳飾り 1 点 (2 個に破損・6) が出土しています。

割れたケツ状耳飾りと勾玉

ケツ状耳飾りとは、今から 8,000 年ほど前の縄文時代早期に中国から日本に伝わった耳飾りです。中国では堅い白色の玉^{きよく}が用いられましたが、日本ではやわらかい石が使われています。耳朶に穴を開け、ぶら下げるよう耳に通して用いました。

図4

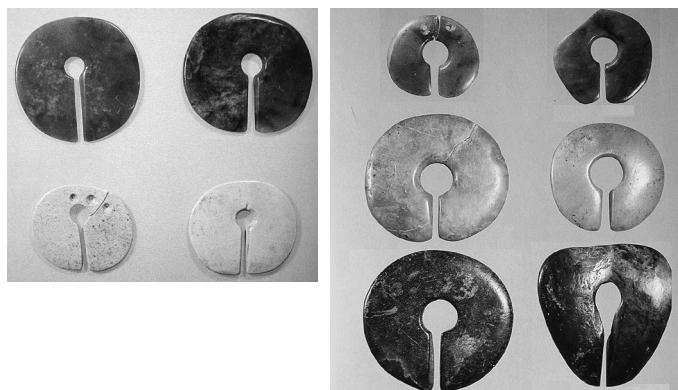


図4は関東地方の各地で発見されたケツ状耳飾りです。千葉県北部や霞ヶ浦の周辺では粘土を焼いて作ったケツ状耳飾りもたくさん発見されています。

本遺跡の 400 号土坑におけるケツ状耳飾りの出土状況は、破損した 2 片を背中合わせになるように配置し、その間に琥珀製丸玉をはさみ込んでいます。これらの玉類は、おそらくケツ状耳飾りを中央部に配し、その両側に琥珀製丸玉と滑石製管玉を交互に紐を通して用いました。

して用いられたものと思われます (図 5)。

本来、ケツ状耳飾りはその名前の通り耳飾りとして用いられていました。耳飾りは中央部で破損するが多く、縄文人は割れた耳飾りに穴をあけ、糸のようなもので縛って再び耳飾りとして使い続けていました。また、割れたケツ状耳飾りは C 字形となり、勾玉の形に似ています。勾玉は縄文時代後期ごろから生まれた、日本独自の装飾品と考えられていますが、その形の由来ははつきりしていません。動物の牙説、胎児の形説、魂の形説、そしてケツ状耳飾りの割れたものを首飾りに用いる説等があります。

今回、400 号土坑から発見された一連の首飾りには、前述のとおり図 5 のような状況

が想定されます。ケツ状耳飾りの割れたものが、琥珀玉を間にはさみ込んだ状態で発見されました。これは勾玉の起源がケツ状耳飾りにある可能性を示す、国内で初めての発見です。

図5



玉類の材質

琥珀は赤い玉で、遺跡の位置的環境から銚子産が想定されます。管玉は、乳白色に緑色の斑点が多く含まれ、輝石の混入が特徴的で、常陸太田周辺で産出する滑石に似ています。比較的近い地域からの採集が想定されます。一方、ケツ状耳飾は白色を呈し、不純物の少ない

滑石を用いています。他の地域から運び込まれた可能性があります。

太古の昔から、『三種の神器』として日本人に愛された勾玉の起源が、今回の発見で直ちにケツ状耳飾りと結びつけるのは、まだ研究を進めなければなりませんが、今回の発見は極めて重要な歴史解明の手掛かりとなる発見になりました。

おわりに

本遺跡の発掘調査報告書は平成 22 年 12 月に刊行されています。また、発掘調査にかかる資料はすべて石岡市教育委員会で保管されています。

なお、本稿をまとめるに当たり、齋藤弘道・瓦吹堅・小杉山大輔・谷仲俊雄・角張淳一（故人）・大賀健の皆さんにご指導とご助言を賜りました。記して感謝申し上げます。

